

340) みよ子

初めて恋に挫折したころ 自分の殻にとじこもってた
生きてくことがやりきれなくて 不毛の大地^{さまよ}彷徨い続けた
そんな夏の日みよ子に逢って かすかな光り輝きだした
モノクロームの青春の日々 初めて知った安らぎだった

みよ子は僕に^{いのち}生命を懸けて 愛することを示してくれた
愛はひたすら自分を捨てて 尽くすことだと教えてくれた
僕はいつかみよ子のことを 誰より信じそして愛した
大地を這って泥にまみれて やっと掴んだ倖せだった

倖せの日は長くなかった 「立派な人になってください」
別れの言葉ひとつ残して みよ子は他へ嫁いでいった
いま悔やんでも悔やみきれない 年上^{ひと}の女みよ子であった
涙流して別れたあの日 悲しい雪が降り積もってた

古いアルバム広げるたびに みよ子の言葉よみがえります
人を愛するただそのために 人は生まれて死んでくのだと
悲しいときも苦しいときも 僕をささえたみよ子の言葉
人を愛するそれはひたすら 自分を捨てて尽くすことだと

悲しい雪が積もってくると みよ子のことを思い出します
僕が愛したひとりの女 ^{しんきれい}心綺麗な^{ひと}年上の女
^{とき}歳月は過ぎ去りめぐる季節も あの面影もいまは帰らず
ふたり歩いた倖せの日々 雪がすべてを^{うづ}埋めてしまった